

川上 将史／かわかみ まさし 1982年、平取町出身。道立平取高校を卒業後、札幌の北海道医薬専門学校へ。03年にふるさと平取に戻り平取町文化財課（平取町立二風谷アイヌ文化博物館）が主管した、「アイヌ文化振興クラスター基盤創出事業」に携わり、アイヌ口承文芸のユカラの習得に励む。同年、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構主催の「第7回アイヌ語弁論大会イタカンロー」口承文芸部門で最優秀賞受賞。05年の同大会の弁論部門では優秀賞を受賞。04年から「アイヌ文化環境保全対策調査」の調査員を務める。今後も引き続きアイヌ文化に関わる仕事に携わっていきたいと願う。



二風谷のミニFM局、エフエム二風谷放送（愛称：FMピバウシ、76.1MHz）。二風谷の話題やアイヌ文化に関わることが、アイヌ語のレッスンなどを放送。月1回のオンエアを心待ちにしているファンに支えられ、開局5年を迎える。06年4月からは、神戸市のミニFM局「FMわいわい」でも同時放送。インターネットで「FMピバウシ」で検索すると、ダウンロード方式で聴くこともできる。川上氏は進行スタッフの一人として参画

劇的などんでん返しのハッピーエンド。ドラマチックな展開と、川上氏が全身で語ってくれるその喜びのように、思わずぐいぐい引き込まれてしまった。

川上氏とアイヌ口承文芸の出会いは、03年平取町で実施された『アイヌ文化振興クラスター基盤創出事業』がきっかけだった。「札幌から実家の平取に戻っていた時間で、バイトを探してたんですね。したらたまたまクラスターという、アイヌの伝統文化を継承・再生させていくために推進されている事業で雇っていただき、そこで口承文芸とめぐり合ったんです。文化継承と一口にいても、踊り、服、食べ物、ほかにもいろいろあって、いま全部は言い切れないのですが、その中でユカラ、口承文芸の勉強をしてみないかと博物館の学芸員の吉原秀喜さんに声をかけていたんです」

### 3種のアイヌ口承文芸

以前からユカラには興味があつて？  
「特にはなかったです。どうして  
も文化を継承しなくては、という  
ものなかった。この仕事をして初め  
てユカラというものを知ったのです。

練習が始まって、参考になる文献とか資料とか調べていくうちに、自分の祖先がユカラをずーっと昔から、どれくらい昔からかもわからないくらい昔々から、ずーっとずーっと語り継いできたものだを知って、がぜん興味がわいてきちゃったんです。自分の祖先のことだから自分にも関わってくることでしょ」

ユカラは昔、どんなところで語られていたのだろう。「夜、囲炉裏を囲んで子どもたちに聞かせたり、寄り合いやお祭りなどの一興として語られていたようです。僕たちの地域ではユカラと言いますが、ほかの地域ではサコロベ、ハウキとも呼ばれています。ほかにも口承文芸には、カムイユカラ、神様が語ったといわれる話（うた）ですね、それにウウベケレ、昔話があります。でもウウベケレは難しい」

というの？ 「ウウベケレは、昔あつたことを淡々と語る。自分の記憶をたどって、自分のしゃべり方で淡々と、抑揚がないというか。でもこれは日常的にアイヌ語を自由に操れないと語れない。だから難しい。カムイユカラは、サケヘという繰り返すことばが合間に入るのが特徴です。英語でいうリフレインですね。たとえば…

アンナホーレ ホーレホーレ  
そのあとに、  
ア・コロ・コタンボ  
アンナホーレ ホーレホーレ  
というふう」。

青年は、少し背すじを伸ばし、よく通る澄んだ声で二節を語った。風のように軽やかに流れ、リフレインしながら空に吸い込まれていく音節。今でもその声を耳の奥に感ずることができる。

### ユカラの魅力のとりこ

「ユカラは、他の口承文芸とはまったく違うんです」と、川上氏は続ける。「まず、長い。カムイユカラもウウベケレも長くて40〜50分。ユカラは短くて40〜50分かつて語られるんです。普通だと2時間くらい。いま確認されている最長のユカラは、語りきるのに3日間を要すると言われています。途中で少々のブレイクタイムはあるんですけど、それにしても3日間！」

スケールが違うんですね。「そう、ユカラは壮大なストーリーが多いんですよ。だから、面白い。それと決定的な特徴は、レパニという拍子をとる棒があることです。ユカラは、囲炉裏端で語られるものなので、